

松本悦子

生きのびて



An abstract, layered geometric pattern in various shades of green and white, resembling folded paper or overlapping translucent shapes, occupies the top half of the cover.

生きのびて

松本悦子

読売新聞社

生きのびて

著者——松本悦子

さいとういুক
斎藤郁夫

きくちゆか
菊地由夏

まつもとえつこ
のぐちよしこ
野口良子

まつおかおり
松岡香

編集人——岡野敏之

発行人——伏見 勝

発行所——読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の一

〒一〇〇一五五

大阪市北区野崎町五の九

〒五三〇

北九州市小倉北区明和町一の一

〒八〇二七一

名古屋市中区栄一の一七の六

〒四六〇一七〇

印刷所——大日本印刷株式会社

製本所——ナシヨナル製本協同組合

第一刷——一九九六年（平成八年）二月十八日

ISBN4-643-96003-5 C0095

© 1996, Yomiuri Shimbun-sha.

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り換えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

日本音楽著作権協会(出)許諾 No. 9572134-501

第16回読売「ヒューマン・ドキュメンタリー」大賞
カネボウ スペシャル入賞作品集『生きのびて』 目次

優秀賞 生きのびて

松本 悦子 5

優秀賞 神様はいる

斎藤 郁夫 65

入選 生きてるって楽しいよ

菊地 由夏 129

入選 一九三五年生まれ

野口 良子 183

入選 シゲは夜間中学生

松岡 香 247

入選 恵子のこと

選後雑感

野上 龍雄 296

選考経過

入賞者一覧

301 300

装画 装幀
富岡 中島
直子 かほる

生きのびて

第16回読売「ヒューマン・ドキュメンタリー」大賞
カネボウスペシャル
入賞作品集

優秀賞

生きのびて

まつもと悦子
松本悦子

まつもと えつこ 昭和5年8月11日、朝鮮
民主主義人民共和国（北朝鮮）生まれ。主婦。
旧満州（中国東北地方）安東京橋高等女学校
を終戦のため中退。

昭和28年帰国。

現住所 茨城県ひたちなか市稲田 358-5

終 戦

秋晴れの清々しい日が続いていた。一九四四年十月、太平洋戦争が勃発し、三年近く経とうとしていたが、旧満州（中国東北地方）の食料事情は依然良かった。たまに豆粒ほどにしか見えないB 29の飛来があるくらいで、空襲もなかった。少女だった私には、戦争の実感はあまりなかった。

私の名は、安部悦子。安東京橋高等女学校の三年生で十五歳。髪は三つ編み、背丈は普通でちよつと痩せ形。昔から悦ちゃんと呼ばれていた。私の家族は父の転勤で北朝鮮より大連、北京へ移り、今は満州と朝鮮との国境の街、安東（現、中国・丹東^{ダントウ}）に住んでいた。父・孝は福岡県柳川の出身で日本で教員をしていたが、大正九年小学校の校長職を得るために北朝鮮に移住していた。体格はよく、柔道五段、弓道三段だった。毛皮の帽子が良く似合い、鶴の足の形をしたステッキが自慢の品だった。裏庭で弓を引き、冬は犬を連れ狩猟に出かけた。母・政枝は熊本の銀行頭取の娘で、上品で静かな人だった。子供にはとても優しく、父が子供をしかった時も、いつもかばってくれた。兄弟は六人で私は四番目だった。私と弟二人には、幼いので各々にお守役の朝鮮人がついていた。大連では、炊事係の中国人と雑用係の少年もいた。私の楽しみは、出張から帰ってくる父を、ハイヤーで空港に出迎えることだった。

悲しい十月二十日がやってきた。その日は女学校の遠足があり、母がご馳走の一杯詰まったお弁当を作ってくれた。遠足から帰り、弁当箱を流しに持って行くと、そこに父が立っていた。父が炊事場にいるのを、今まで見た事はなかった。

「お母さんは」

と尋ねた。

父はうつむいたまま、

「倒れた」

とだけ言った。

私は事の重大さに驚き、座敷の襖ふすまをそつと開けた。母は眠っていた。父が入ってきて、声をかけてはならないと小声で言った。母は時々、額の氷のうを手で払いのける仕草をするだけで、ただただ眠っていた。

一週間昏睡こんすいが続き、十月二十八日夜、永眠した。四十八歳、脳溢血のういつけつだった。二日後、母の柩ひつぎは馬車に乗せられ、鎮江山ちんこうざんの中腹にある火葬場に向かった。輓わだちで柩が揺れた。一昨日まで絶対安静だったのに、あんなに揺れていいんだろうか。後ろの馬車の中で私は、ぼんやりと考えていた。

父が継母と再婚したのは、翌年三月だった。父の友人の紹介によるお見合いで、父五十歳、継母三十六歳だった。継母は、小六の女の子を連れて嫁いできた。幼稚園の先生をしており、前夫とは死別だった。亡くなった母と違い、洋風の料理をよく食卓に並べた。安東一の美人と言われ、テニスをし、流行歌のレコード盤もたくさん持っていた。以前は、わが家では、流行歌など口ずさむことさえ禁じられていたのに、父は、うるさく言わなかった。継母と連れ立ってテニスにも出かけた。再婚後の父は若々しく華やいで見えた。

父と継母に弟の敏、裕、義妹の泰子と私を合わせて六人が新家族だった。姉の宣子は、小学校教員、坂田竹二郎さんの妻になり北朝鮮・新義州にいた。長兄の博は、東京の大学から学徒動員で栃木の部隊にいた。次兄の孟つとむは、中学四年の春に予科練へ志願して奈良にいた。

満州の冬は、厳しい寒さだったが、家の中は、暖かかった。ペチカに赤々と炎が上がり、顔をほてらせながら、兄弟でトランプに興じた。継母が持つてきてくれた、盆の上の山盛りのみかんを、勝った者がいくつとると互いに争った。

一九四五年八月十五日にすべてが変わった。私たちは、勤労奉仕の地下足袋工場から、先生の引率で女学校の校庭に集合した。校舎には関東軍が駐留していて、入れなかったが、久し振りの学校に懐かしさで胸が一杯になった。

そんな感傷も束の間、何かただごとならぬ空気が漂っていた。担任の先生が各クラスの前に立った。壇上に上がった校長先生が、沈痛な面持ちで、日本が戦争に負けたことを告げた。

「戦争が終わった？」

「日本が敗れた？」

女の先生はハンカチで目頭を押さえている。しかし、私には「負けた」ことを漠然としか受け取るこ
とができなかった。

敗戦と同時に、中国人の罵倒と投石が始まり、うかつには外に出られない状態となった。敗戦国の惨めさが色濃く日本人に、のしかかってきた。

安東駅の裏手にはびしりと、土の上に階級章のない兵士が座っていた。家の窓から見える線路には、かつてのように客車ではなく、天井のない貨車が幾台も連なり、その上には元関東軍兵士がびしり詰め込まれていた。

「兵隊さんは、どこへ運ばれて行くの？」

と父に尋ねると、

「シベリアだ」

と言うのみで、後は何も語ろうとしなかった。元兵士たちは、いまや捕虜となり、彼らの行く先は酷寒のシベリアであった。私の家には、父を訪ねて、兵士たちがよく遊びに来たものだが、彼らも乗っているかもしれない。しかし、私には知る術もなかった。

終戦の混乱の中、嬉しいこともあった。私の家には高い煉瓦の塀があったが、ある朝、目を覚まして庭に行くと、何か落ちていた。それは、カボチャ、じゃが芋や米などが入ったボロボロの包みだった。数日おきに、包みが投げ込まれる事が続いた。それは、父が終戦前、可愛がついていた使用人の中国人が、夜の闇に隠れて庭先へ投げ込んでくれたものだった。玄関からでは他の中国人に見られて危ないので、名を告げもせず、ただ父を思つての差し入れであった。父の仕事もなくなり、突然、苦しい生活を強いられていたわが家にとって、飢えを凌ぐ有り難い食料だった。

終戦後、一か月たつと、私の家にも、旧満州北部から逃げてきた着のままの人々が、隣組から割り当てられ、移り住んできた。元の住人が住めるのは一部屋だけに限られ、他の部屋には押し込められるだけの人々が詰め込まれた。炊事場も、風呂も、トイレもみな共同と化して、異様な雰囲気の日々が始まった。中には若い女性もいたが、頭を丸刈りにしていた。彼女は、モンペ姿であったが、その顔はとても美しく、私をハツとさせた。彼女は、ロシア兵に襲われないように変装しているのだと継母が教えてくれた。ごった返した家の中は、男たちが仕事に行くわけでもなく、一日中、やり切れぬ思いと不安で満ちていた。

私の家の近くに、父と近所付き合ひのある山口県出身の久芳家^{くはう}があった。夫婦二人の久芳家に、夏休みで安東に来ていて、終戦で町から出られなくなった久芳さんの甥の松本年正^{としまさ}さんがいた。色白で長身、奉天工科大学の三年生で電気技術を学んでいた。私は亡き母の話ができる久芳家に時々遊びに行っていた。

初秋の日、私は、久芳家の台所で、その日ご馳走になったお菓子の皿を洗っていた。その日は暑く、年正さんが、汗をかきながら台所へやってきた。

「悅ちゃん、何か冷たい飲み物ある？」

私はカルピスをコップにつぎ、水で薄めて差し出した。彼は、一口飲んで、

「あつ、これ甘すぎるよ」

とコップを返した。

私は、カルピスを入れすぎたんだと思い、

「すみません」

と笑って、水を足してあげた。

彼とは終戦前、一度会っていた。久芳さんと共に、私の家へ食事に来たことがあった。しかし、言葉を交わしたのは、今回が初めてだった。それから、彼は、私の家をしばしば訪ねるようになり、弟たちとよく遊んでくれた。久芳家にはマンドリンがあり、彼はよく『影を慕いて』を弾いてくれた。私はいつか、彼へ淡い思いを抱くようになった。十一月になると、安東の日本人の多くは数か所に集められることになり、私の家族もわが家を立ち退かされることになった。収容先は、安東神社の坂の中ほどにある、公民館のような建物であった。

移住に際しては、たんすなどの家具類はもちろん運べない。他の地から流れ着いた人々はそのままの移動でよいのだが、これまで居住していた私の家族は持つていくものと、捨てていくものを選ばなければならなかった。本をより分け、衣類も必要なものだけを選んだ。私は、できるだけ母の体温が感じられる服をリュックに詰め込んだ。

当時の女性は、和服から洋服へあこがれていた。亡き母は、実家の熊本からミシンを持つてきて、戦争中の布など手に入らない時代に、和服をほどこいては、洋服作りに余念がなかった。以前は、夏でも絹の着物を着ていた母も、ワンピースを好んで着るようになっていた。

私が選んだのは、母が編んでくれた赤いセーターだった。これは、決して手放せない。また、来客がある時母が奏でた琴の爪も捨てられなかった。私は、その爪を美しい漆器の箱に入れたまま、持つていくことにした。リュックを担ぐと、お母さんが、いつも背中にいるような気がした。

荷物の整理を終えると、私たちは、愛着のあるわが家を後にして、坂を上って、命令された建物へと移動した。そこは、板張りの冷たい洋風館であった。二家族ずつが一部屋を衝立で仕切つて居住することになった。畳と違つて床は冷たかった。さらに、少ない夜具で、旧満州の晩秋の冷え込みに耐えねばならなかった。行き先の不安の中に身を縮め、空腹をこらえながら、眠れぬ夜をまんじりともせず過ごした。早く夜が明けるのを待つ日々がつづいた。

旧満州に取り残された日本人の扱いは、地域によつて事情が違つていた。奉天には、国民党の蔣介石軍が駐留していて、日本へ帰国することができたが、安東は、ロシア兵と八路軍が終戦と同時に入りこみ、帰国は到底不可能だと言われていた。

八路兵は女性に対して何もしないが、ロシア兵は女性とみたら、

「ハラシヨ（今日は）」

と薄笑いを浮かべ近寄つてきた。また、日本人から奪つた時計を、腕の先から脇まで、軍服の上につけて得意がつている者もいた。

秋が深まる中、北朝鮮と旧満州の境を流れる凍りつく前の鴨緑江おうりょくこうの川辺で、毎日銃殺が繰り返されていた。省長、省次長、市長も射殺されたと聞いた。弟の同級生のお父さんも殺されたという。中国人

の親日派の人たちも処刑されていった。身も凍る日々が続いた。先生はどうなったのだろうか。友人はみんな無事なのだろうか。人々の消息を知る術もなく、恐怖と不安の中で、目的も希望もないまま、厳しい冬がやってきた。

状況はますます悪化し、戦々恐々としながら、春から夏を迎えた。

終戦後一年近くたった七月中旬、父が数人の人たちと、真剣に額を擦り合わせるようにして、何やら打ち合わせをしていた。密談は、三日、四日と続いた。一体、何の相談なんだろう。もちろん年端もいらない私に話してくれるはずがなかった。

数日たって、どうやら何事か決まったようだった。その夜、家族全員が集合させられた。といっても一部屋を区切った狭いところだから、何という事はない。いつものように自分の座る場所へ行って、顔を父に向けるだけでよかった。父は、三日後に各々の荷を背負い、奉天へ逃避行すること、自分で持てる荷物の重さを確認する事を告げた。安東を脱出するのだ。ここにいっても飢えるか、身に危険が迫るのは必至なのだから、父を信じてついていこう。きっと成功して日本へ帰れるはずだ。私は、不安と期待で緊張して、また眠れぬ夜を送った。

はぐれて

私は、わが家を立ち去るときに携えてきたわずかな荷を、またもやひっくり返して、さらに少なくした。大切にしていた何冊かの本も、重いので一冊を残して捨てた。しかし、母の形見だけは絶対に捨てられなかった。形見をリュックの奥底にしまい、後は寒さをしのぐ衣類をいれた。夏のことなど考えま

い。まずは防寒の衣類だ。ずいぶん減らしたつもりだったが、リュックは、すぐに一杯になった。靴も歩きやすいのを一足だけ選んだ。ついに、私のすべての持ち物は、ちつぽけなりリュック一つ分だけになってしまった。

七月下旬の深夜、逃避行する人たちが、安東神社の裏庭に集まった。元関東東軍の兵士が先頭にたった。民間人がそれに続き、総勢約三十人が一列に並んで歩を進めた。男も女も緊張していた。顔は皆こわばり、押し黙っていた。私は、幼い弟と妹がついてこられるのだろうかと心配になった。その夜は歩けるところまで歩いた。途中、どこから銃声が聞こえて来た。犬がけたたましく吠えていた。私たちは、音を立ててはならない。町中を避け山道へ入った。歩き疲れ、夜が明ける前に草むらの中で、野宿した。昼間は、人目に触れないように、山の中に隠れて歩き通した。次の日も、同じように歩き続けた。

三日目の昼過ぎ、突然、先頭の元兵士が叫んだ。

「八路だ、逃げろ」

皆、ざわめいたが、すぐに散り散りになった。右は高粱畑で、左はなだらかな山になっていた。私は、とっさに山の方向へ身を隠した。回りを見渡すと、私の家族はどこにもいなかった。父も母も、弟も妹も見あたらない。はぐれてしまった！でもここで声を出して叫ぶわけにはいかない。草むらの中に身を隠し息を潜めた。私は地を這い、身をこわばらせながら顔をうずめていた。

ガサガサと軍靴の音がした。私はなおも身をよじり体を地面に押しつけた。

「起来、起来（立て、立て）」

八路兵が銃床でこずきながら、一人、二人と日本人を見つけ出していた。私は、頭の中が空白になり何も出来なくなってしまうた。抵抗した男たちは、銃で殴られているようだった。若い八路兵の怒鳴り